

## 飯島賢二の『恐縮ですが…一言コラム』

### 第 217 回 ある病院でのこわ〜い話 (???)

2007.9.2

ある病院でのこわ〜い、こわい話である。信じる？それとも小噺？



医師「悪いニュースがあります。間違えて良いほうの足を切ってしまったのです。」  
「でもいいニュースもあります。悪いほうの足は良くなっています」



精神病患者「先生、私は自分が犬なのではないかと思っているのですが」  
医者「そんなばかな。それで、いったいつ頃からそのように思うようになったのですか？」  
患者「私が子犬の頃からです」



A「なあ。きみは患者に恋したことがあるか」  
B「ああ。医者だって恋はする。たまたま相手が患者だったというだけさ」  
A「・・・そうか。そうだよな。患者に恋したっていいんだよな」  
B「なんだよ、もしかしてお前」  
A「うん・・・。立場上、許されない恋かと悩んだこともあったけど、お前の話を聞いて安心した。患者に恋するのはいけないことじゃない。恋はすばらしい。恋の炎は誰にも消せやしない」  
B「でも、お前は獣医だろ」



おばあちゃん：「先生、左足のひざが痛くてたまりません。右ひざはそんなことないんですが」  
医者：「おばあちゃん、もうお歳ですから、仕方がないのかも…」  
おばあちゃん：「そんなことないでしょう、右足も同（おな）い歳です」



はしごを踏み外した患者が送られてきた。  
医者：「残念ながら手遅れですな」  
患者：「でも、落ちて直ぐ来たんです。手遅れと言うほど時間がたっていませんよ」  
医者：「でも、手遅れです」  
患者：「いったい何時来れば、手遅れじゃなかったんですか？」  
医者：「はしごから落ちる前に来なさい」



もうすぐ手術をうけることになっている男が必死になって車椅子でホールにやってきた。  
婦長が彼を止め、尋ねた。  
「どうしたんですか？」「今、看護婦さんが言ったんです。『簡単な手術だから心配ないですよ。きつとうまくいきますわ』って」「あなたを安心させようとしたんでしょ。何をそんなに怖がっているの」「看護婦さんは私に言ったんじゃないんです。主治医にそう言ったんです」

いやいや失敬、お後がよろしいようで…